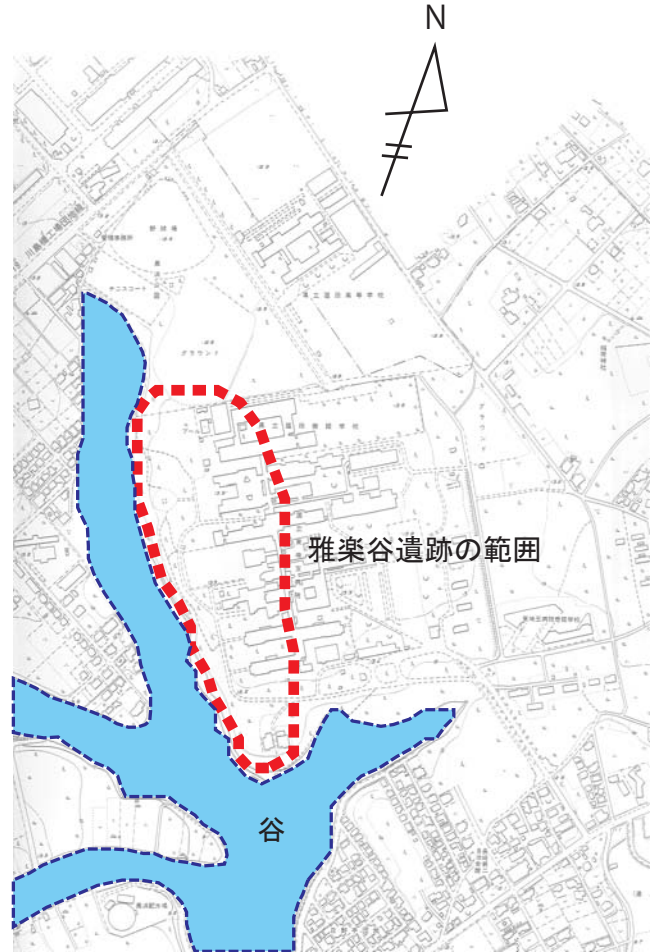


雅楽谷遺跡 (うたやいせき)

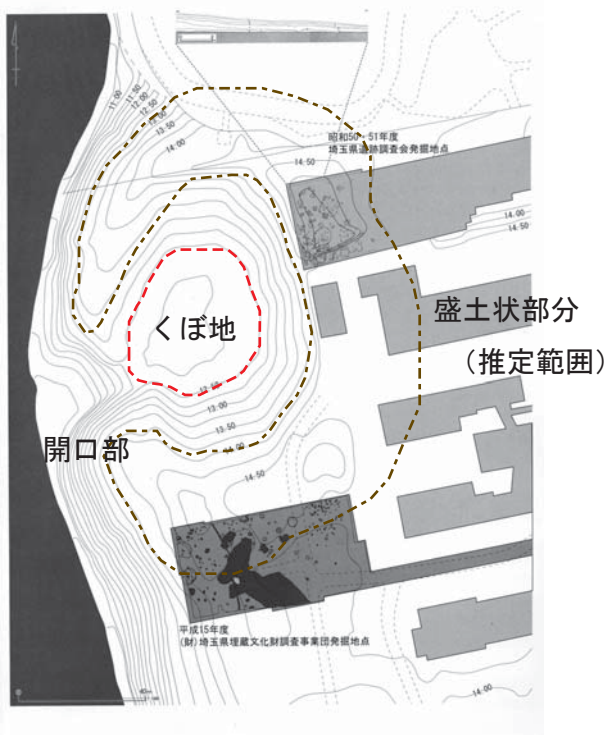
雅楽谷遺跡は、大字黒浜字雅楽谷の独立行政法人東埼玉病院敷地内から黒浜運動公園にかけて所在します。規模は東西約 210m、南北約 460m、面積約 95,000 m²を測ります。南側と東側は谷に面し、人々の水汲み場になっていたと想像されます。現在までに縄文時代後期（堀之内 1 式期）～晩期（安行 3 a 式期）の住居跡 8 軒、竪穴状遺構 2 基、土坑 49 基、炉跡 2 基、土器埋設遺構 5 基が検出され、安行 2 式期と推測される貝塚（オオタニシ主体・ハマグリ）も発見されています。

遺跡からは縄文時代草創期の^{せんとうき}尖頭器や縄文時代前期の土器、奈良・平安時代、中世の遺物も発見され、幅広い時期に生活が営まれていたようですが、縄文時代後期～晩期に最盛期を迎えるようです。

特に、土器のうち代表的なもの 15 点が県指定考古資料に指定され、様々な雑誌でも紹介されています。



雅楽谷遺跡遠景 (埼玉県教育委員会)

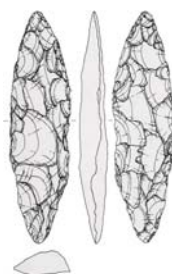


かんじょうもりどじょういこう 雅楽谷遺跡の環状盛土状遺構

雅楽谷遺跡では、近年日本各地で発見され注目されている「環状盛土遺構」とくぼ地が大変良い状態で残されていることです。

環状盛土遺構とは縄文時代の人々が多量の土砂をドーナツ状に盛り上げたもので、雅楽谷遺跡の環状盛土遺構は差し渡し 100mを超える大きなもので、東西 120m、南北 140mを測ります。この内側には東西 40m、南北 45mを測る窪地が残されています。この盛土の中からは土偶や石棒・耳飾りなどの珍しい遺物が出土しています。

この遺跡は後期前半堀之内式の時代から盛土の形成が始まるものとみられ晩期中葉まで形成され、久台遺跡より古くから始められていたようです。また、開口部にも谷筋に凹みが確認され、人工的な造成が行われた可能性も考えられ、将来の確認調査が期待されます。

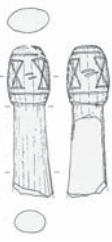


尖頭器 (せんとうき) (せんとうき) : 縄文時代草創期

縄文時代の初めの草創期と呼ばれる時代に発明された「^{やりさき}槍先」に装着する石器です。雅楽谷遺跡内では最も古い生活の痕跡です。

石棒（せきぼう）：縄文時代後期～晩期

棒状の一端または両端に丸く膨らみをつけた磨製の石器で、男性器のシンボルとも、儀礼・祭祀用とも考えられています。



前期後半北海道・東北地方にお目見えし、中期～晩期にかけて関東・中部・関西地方など広範囲に広がりました。日本最大の石棒は長野県佐久市のあぜ道に立つ 2m を越すモノから、一般的には 50cm 前後の石棒が多いようです。

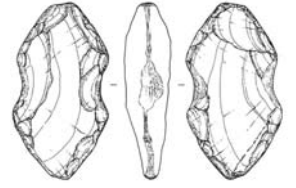
石剣（せっけん）：縄文時代後期～晩期

石剣は身がまっすぐで、両側に刃を持ち、石刀は身の片側に刃を持ったり、身が内側に沿ったりするものです。石棒と石刀・石剣は、その中間形態があり互いに文様・サイズなどにも共通性があるので、互いに関連性があるのは間違いありませんが、石棒からの形態と大陸系金属器の形態の両方が融合して、石刀・石剣が出現したと見るのが妥当なのではないでしょうか。



独鈷石（どっこいし）：縄文後期～晩期の東日本に多い石器です。由来になった密教の法具の「独鈷杵」に類似した形から『独鈷石』と呼ばれています。

用途は「非実用的（非日常的）な用途に用いられた石器」で「祭祀行為に用いた道具」だったのではないかと推測されています。



石棒から石皿へ

転用された石器

この石器は、石棒から石皿・凹石と転用された石器と考えられます。

祭祀の道具として利用されていたものが、何らかの要因により壊れたため、石の無い蓮田では、再度、生活用具として再利用されたのでしょうか…？

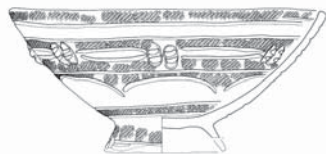


5号土坑出土品（縄文時代晩期初頭） 県指定考古資料

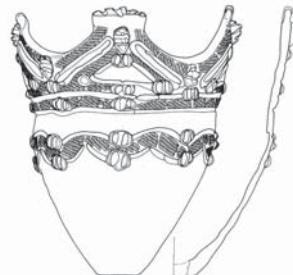
5号土坑（どこう）で一括出土した縄文時代晩期初頭の資料は、文様などに安行（あんぎょう）式土器の伝統を色濃く残しています。浅鉢、深鉢、注口土器（ちゅうこうどき）、台付鉢など、豊富な器種のセット関係が確認できることなどから、26号土坑出土品とともに、晩期安行式土器の基準的な資料とされます。



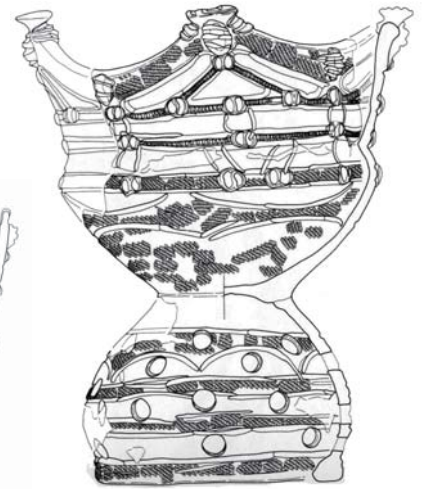
浅鉢（あさばち）



台付浅鉢（だいつきあさばち）



深鉢（ふかばち）

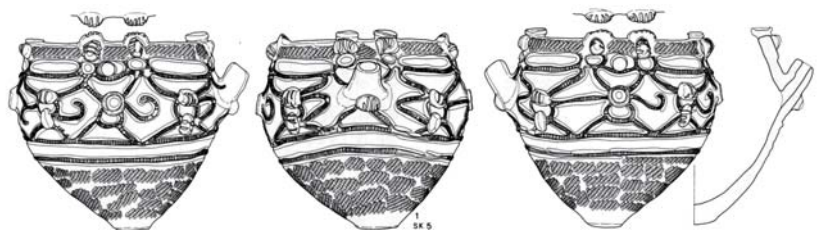
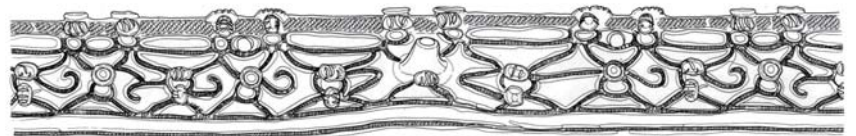


台付深鉢（だいつきふかばち）

注口土器（ちゅうこうどき）

注口土器はこの時期に多く見られるものようですが、最も古いものは縄文時代草創期から、また片口土器と呼ばれる口縁に注ぎ口の付いた土器は早期中頃にも見受けられますが、土器の種類が多様化する縄文中期以降、特に晩期（約 3,000～2,000年）に数多く作られたようです。

土器を成型していく上では、やはり注ぎ口の部分をどのようにつくるか、胴部と注口部の接合をどのようにするかが問題であり、釣り手をもつ注口土器（土瓶のように把手がつけられている）もあり、把手をつける作業が困難な点でした。しかし、釣り手をもっている土器は出土例が少なく、あまり普及しなかったようです。



【引用参考文献】

埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 93 集 雅楽谷遺跡・埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 307 集 雅楽谷遺跡 II